様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０４５３６

研究課題名（和文）変動するＥＵ国境地域におけるエスニック集団共生の課題

研究課題名（英文）Symbiosis of ethnic groups in changing borderland of the EU

研究代表者
加賀美　雅弘（KAGAMI, Masahiro）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：６０１８５７０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、EU域内にある国境地域のさまざまな特性が人の移動の激化に伴って変化するプロセスを、エスニック集団に着目して解明することを目的とした。具体的にはオーストリアとハンガリー、スロヴェニア、チェコ、スロヴァキアとの国境地域を4人の研究者（地理学、文化人類学、歴史学）で分担し、国境地域の変化の解明を目指した。その際、それぞれの地域に居住するエスニック集団の行動や意識、彼らをめぐる政治的、社会的枠組に着目し、マジョリティである地域集団との関係を注視しつつ、EUの国境地域の特性を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
国境地域は異なる社会や文化をもつ地域の接点であり、その動態を明らかにすることによって、地域統合を目指すEUの課題を浮き彫りにすることができる。研究の対象としたオーストリアの四つの国境地域は、いずれも東西ヨーロッパ分断の歴史を経験し、多様なエスニック集団が居住することから、EUが取り組む多文化集団の共生に向けていかなる課題が展開し、解決に向けた作業が進められているかを学際的に明らかにした。これにより時間と空間の視点を踏まえたヨーロッパ地域研究の学術的成果となった。また少数集団に着目した議論を重ねたことは、多様な地域の連携や協力が求められる現代社会における意義を深めることにもなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to elucidate the process by which border areas in the EU change with the intensification of human migration, focusing on ethnic minority groups. Specifically, four researchers on geography, cultural anthropology, and history, shared the border regions of Austria with Hungary, Slovenia, the Czech Republic, and Slovakia, aiming to elucidate changes in border regions. In doing so, we focused on the behavior and consciousness of ethnic minorities and the political and social frameworks concerning them and examined the characteristics of the border regions of the EU.

研究分野：人文地理学

キーワード：国境地域　エスニック集団　オーストリア　ハンガリー　スロヴェニア　スロヴァキア　チェコ　EU

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

EU 域内の国境地域は大きく変容している。そこでは EU による統合政策の一環として国境を越えた越境地域連携事業が推進されており、国境を挟んだ地域住民の間での経済・文化など多岐に及ぶ共同作業が進められている。その一方で、EU 域内の人の移動の自由化が実現したことによって、多様な社会・文化集団が国境地域に流入（通過）し、既存の地域社会に多大なインパクトをもたらし、地域社会が変容する要因になっている。

こうした国境地域の変容は喫緊の研究課題であり、たとえばドイツの地理学でも重要なテーマとして位置づけられている。2015 年ドイツ地理学会ベルリン大会では、難民をはじめとする越境移動者が流入する地域の変化や、地域住民のアイデンティティが越境移動者の流入地域で強化される点を論じた講演に強い関心が寄せられた。

ところで、ヨーロッパの国境地域の特性は、地域的にかなり多様である。現在の中央・東ヨーロッパの国境線のほとんどは近代以降に形成されたが、複雑な民族分布ゆえに多くのエスニック集団を生み、国境地域は分離運動や排斥・迫害など政治的に不安定な場所となってきた。このように中央・東ヨーロッパの国境地域は、国境を隔てて隣接する地域との歴史的な関係の中で構築され、しばしば対立と協調を繰り返しながら政治的、経済的、社会的変化を遂げてきた。

研究代表者は、これまでエスニック集団に着目したヨーロッパの地域変容を構造的に論じてきたが、中央・東ヨーロッパの国境地域については、その歴史的背景を踏まえつつ、国境を隔てて隣接する地域との関係を議論の対象にしてきた。そして EU 域内で国境を越えた緊密な関係が実現され、国境線が「障壁」から「架け橋」へと変化したことにより、国境地域が民族対立やエスニック集団の処遇をめぐった紛争の場から協力の場へと変化したことを指摘してきた一方で、依然として統合が順調に進行していない事実も指摘してきた。それは、中央・東ヨーロッパでは近代以降、民族による国民国家成立と国境の設定、国民・民族集団間の歴史的な関係が大きな影となっているからである。

一方、近年の中央・東ヨーロッパの国境地域には越境移動者の流入が顕在化している。具体的にはロマをはじめ、ウクライナなどの旧ソ連出身者、ベトナム人や中国人などの東・東南アジア出身者、さらに近年では北アフリカや中東からの大量の難民が陸路で国境地域に移動・流入している。その多くはさらに他の地域へと移動するが、国境地域にとどまって商業・サービス業に従事する人々も目立っている。他方、EU と各国政府による移民・難民の保護政策と、異文化社会に対する住民の抵抗や反発、低所得者集団に対する差別や排斥も生じており、多様な文化集団の共生が大きな課題になっている。

このように現在のヨーロッパの国境地域は、さまざまなエスニック集団が居住する複合的な文化地域であり、複雑化した社会構造によって構築された地域とみなすことができる。以上から、EU における中央・東ヨーロッパの国境地域は、多様なエスニック集団が共生を求める地域として検討する必要があると考えるに至った。

２．研究の目的

ヨーロッパでは EU の地域統合政策によって国境線の機能が、地域を分断する「障壁」から統合のための「橋」へと変化しており、これに伴って国境地域も変容を遂げている。特に国境地域には多くの少数民族集団が居住し、また近年は移民や難民など越境移動者が急増しており、結果として EU 域内でもきわめて多様なエスニック集団の居住地域として特徴づけられる。本研究は、二つのタイプのエスニック集団（国境地域の少数民族集団、越境移動者）に着目し、国境地域形成の歴史的経緯とともに、国境地域変容のメカニズムを解明し、多様な文化集団の共生の可能性について考察することを目的とする。

３．研究の方法

EU 域内において、特に中央・東ヨーロッパの国境地域の変容のプロセスを、エスニック集団と関連づけて解明するために、急激な変化を遂げつつある国境地域を対象にし、現地において、主に以下三つの課題に関する調査を行う。(1)国境地域の歴史的発展プロセスとエスニック集団（少数民族集団、越境移動者）の形成・維持、(2)地域住民とエスニック集団の相互関係（適応と対立）、(3)EU による越境地域連携事業の成果と問題点。この課題を達成させるために、オーストリアの三つの国境地域を調査対象地域とし、EU 国境地域におけるエスニック集団の共生の可能性について総合的な考察を行う。

調査研究は、EU 域内の国境地域であるオーストリアのチェコ、ハンガリー、スロヴェニアと接する国境地域で実施する。この国境線は、オーストリア・ハンガリー帝国の崩壊によって 1919 年に形成された。第二次世界大戦後は東西ヨーロッパの分断線となり、冷戦体制の崩壊とともに開放され、2004 年に EU 域内の国境地域となった。それぞれの国境地域の概要は以下のとおりである。

(1)オーストリアのハンガリー国境地域（ブルゲンラント州東部）：第一次世界大戦後のオーストリア・ブルゲンラント州の成立以来、そこに住むエスニック集団（ハンガリー系、クロアチア系、

ロマ）が隣接するハンガリーやクロアチアと密接に関係し、地域固有の文化を形成してきた。2004 年のハンガリーの EU 加盟とそれに続く国境の開放により、越境移動者の流入が目立っている。

(2)オーストリアのスロヴェニア国境地域（ケルンテン州南部）：第一次世界大戦後に国境地域となり、住民のドイツ語化が進む一方で、スロヴェニア系少数民族集団独自の民族文化を強調する運動も展開してきた。現在もスロヴェニアと連携したアピールを続けている。2004 年のスロヴェニアの EU 加盟とそれに続く国境開放により、スロヴェニアだけでなく、バルカン諸国からの越境移動者も流入している。

(3)オーストリアのスロヴァキア国境地域：第一次世界大戦後以来の国境地域であり、鉄のカーテンによって厳重な国境管理がなされてきた。しかし、2004 年のスロヴァキアの EU 加盟とそれに続く国境開放により、人の移動が目立っている。

(4)オーストリアのチェコ国境地域（ニーダーエスターライヒ州北部）：古くからの密接な地域間関係が、第一次世界大戦後の国境成立と、第二次世界大戦後のドイツ系住民の強制移動、東西冷戦によって分断された。しかし、2004 年のチェコの EU 加盟とそれに続く国境開放により、人の移動が目立っている。

４．研究成果

オーストリアの四つの国境地域において現地調査を実施し、以下のような研究成果が得られた。

(1)ハンガリーとの国境地域としてオーストリア東端に位置するブルゲンラント州におけるエスニック集団として、ハンガリー系、クロアチア系およびロマの教育および文化活動に関する調査を、特に二言語学校や自助団体において行った。ブルゲンラント州はオーストリア国内において経済的に開発の余地を多く残しており、EU において経済振興地域 Ziel-1 に指定されるなど、経済的支援の対象となってきた。近年は観光に力が入れられており、リゾート開発が進められている。

ブルゲンラント州は歴史的に国境地域であったことから、多くのエスニック集団が居住しており、それぞれ自助組織を中心にして権利の主張や固有の文化のアピールと、次の世代への継承が積極的に行われている。

この研究では特にロマに注目し、彼らが依然として差別の対象とされている社会的状況と、自身の権利や安全を求める活動を自主的に取り組んでいることについて、現地でのインタビューを中心にした調査を行った。

多くのロマが居住する町オーバーワートにおいて、今もなおロマの居住地区が隔離されていること、彼らが社会的に排除されていることが景観観察とインタビュー調査から把握できた。その一方で、オーバーワートにあるロマの自助団体「カリカ協会」において、ロマ自身が教育や文化活動などロマの住民を対象にした活動を積極的に行っていることも明らかになった。そこではロマの伝統文化の継承はもちろんのこと、若者の失業や子どもの教育、高齢者の生きがいなどの課題に対する取り組みがなされている。ロマの貧困や差別といった社会的課題が深刻であり、その実態の解明が必要であることを確認した。なお、ブルゲンラント・ロマ市民大学が設立されており、ロマ支援者の育成やロマと非ロマの交流イベントを開催して、相互の理解を深める試みもなされていることも確認した。

近年、ロマの自助組織の活動領域が拡大しつつある点は、今後のロマの社会的な動向を考えるうえで重要であると思われる。たとえば、かつてオーバーワートで起こったロマ襲撃事件を記念するモニュメントの設置と毎年の追悼集会を積極的に支援し、オーストリア国内に事件の記憶を継承させる努力をしている。このほか、特に子どもたちを対象にした補習授業や差別撲滅キャンペーン、伝統料理や語り部によるロマの歴史を紹介するメディアの制作などの活動がなされており、いずれもロマ自身がオーストリア社会で共生する可能性をもたらすものと考えられる。

以上の活動を通して、ロマ固有の文化が世代を越えて継承され、エスニック集団としてのロマのアイデンティティが保持されることと、オーストリアの国民として社会的に統合されることが並行して進行することが期待されている。

残された研究課題として、ロマに対するオーストリア社会の態度とまなざしの実態とその変化を解明することがあげられる。一般社会におけるロマ差別がいかに縮小されていくのか。そのための取り組みについて、今後明らかにすべきと考える。

(2)スロヴェニアとの国境地域であるオーストリアのケルンテン州南東の小都市で現地調査を行った。この地域は、ドイツ語とスロヴェニア語をめぐって歴史的に何度かにわたって非常に厳しい緊張関係を経験してきた。21 世紀初頭からその緊張関係が緩和傾向にあることについて聞き取り調査を行い、文化活動が顕著な役割を果たしていることが明らかになった。あわせて EU による難民受け入れの一端を担ってアジール申請者を受け入れている宿泊施設を訪問し、経営者家族からその成立以来の展開過程について、建物の整備や入居者の変遷とあわせて聞き取り調査を行った。

2018 年には EU による難民受け入れはすでに国際政治の議題でなくなったが、ローカルな社会において受け入れはその後どのように展開しているかについてインタビュー調査を行った。難民に対する態度はさまざまであること、積極的に支援しようする人がいても隣人関係に微妙な影響を与えること、支援は家族全員を巻き込むことになること、そうした経験を経てふさわしい支援の形をそれぞれが考えるようになっていることが語られた。また、オーストリア／スロヴェニアの「国境を歩く」催しを調査した。この催しにはオーストリアとスロヴェニア両国の複数の自治体が参加しており、国境の自然資源と歴史資源を見出していくプロジェクトが展開している。招かれる講師は「半専門家」化しており、国境をめぐる知識が EU や州政府などの支援組織の思惑もからみながら観光資源化しつつあることが明らかになった。

さらに、20 世紀を通じて二言語地域における少数言語グループの文化活動であったものが，1990 年代末から新たな展開を示すようになり、特定の言語の範疇を越えて「多文化」を標榜するようになったこと、これと並行して、EU の農業政策の下でローカルな農業経営のあり方に大きな変更が起こっていることが明らかになった。

ケルンテン南東の国境地域では住民はドイツ語とスロヴェニア語の二言語を日常語とし、歴史的にスロヴェニア語話者の政治的な権利が地方政治の争点となってきた。こうした論点は現在も存在するが、スロヴェニアの EU 加盟後、国境の意味はより多元的なものになった。経済活動が国境を易々と越えていく一方で、国境の歴史と自然を遺産化し、さらにそれを資源としたツーリズムが国境の両側で打ち出されていく。このように地域において国境が相対化され、飼いならされていくように見えるのであるが、国境が不意に顕在化する場面もある。2015 年の難民危機に際しては、国家が「インフォーマルに」国境警備を強化した。さらに 2020 年の COVID-19 では、国境は完全閉鎖された。こうした状況から、国境を制御する主体は国家か EU か、そこで制御されているものとは何か、顕在しながら潜在する国境をめぐって住民世界になにがあらわれつつあるのか、といった問いが浮上した。

(3)オーストリアとスロヴァキアとの国境地域に適用された EU の国境地域政策 INTERREG プログラムについて、地域特性を分析したうえで、政策の展開を明らかにした。この地域は、ウィーンとブラティスラヴァの 2 首都が立地する中央ヨーロッパを代表する成長地域である。しかし、国境地域内では都市と農村部の格差が存在しており、周辺部の自律性を高め農村経済や農村社会を活性化する対策が求められている。

本地域に適用された INTERREG プログラムは、こうした地域特性を強く反映している。これまでは交通インフラ整備の分野で成果が上がっていたが、Interreg V（2014～2020 年）では、自然・文化遺産・生物多様性の推進といった分野への予算配分が最も大きくなっている。農村部の豊かな自然環境や文化遺産を、国境を越えて保全し、地域資源として活用することで地域の発展を促そうとしている。

そこで本研究では、文化分野の連携事業に焦点を当て、その実態を明らかにした。その際に、スロヴァキア側の小カルパチア地域にかつて集住していたドイツ系少数民族カルパチア・ドイツ人に注目し、彼らの文化や歴史に光を当てた。まず、大学図書館や関係団体機関での資料収集を行うとともに、彼らの入植によって普及したブドウ栽培・ワイン醸造業に注目して、Modora、Pezinok などのブラティスラヴァ近郊農村地域においてカルパチア・ドイツ人の影響が現在の景観にいかにみられるのかを調査した。その結果、彼らが入植した中世当時の典型的な「路村」構造が残されており、現在でもブドウ栽培やワイン醸造業が盛んであることが判明した。一方で、醸造家や組合等への聞き取り調査の結果、現在のワイン醸造家の多くはカルパチア・ドイツ系ではなく、スロヴァキア系であることが明らかになった。第二次世界大戦後カルパチア・ドイツ人が大量に国外に追放されたのち、1990 年代に入りかつてのワイン名産地の復興を目指してスロヴァキア系住民がワインづくりに新規参入したものが多いことが明らかになった。

以上の予備的な調査から、冷戦終結後の環境変化のなかで、カルパチア・ドイツ人のかつての集住地域では、彼らの文化や地域性を再評価し、地域発展の手段として活用しようとする戦略がとられ、さらに同じドイツ語圏であるオーストリア側と国境を越えて連携を深めようとしているのではないか、という仮説が導き出された。

そこで、カルパチア・ドイツ人の地域文化の保護・再生に関わる INTERREG プログラムについて調査を実施した。本研究で事例として取り上げた TRA-KER プログラムは、カルパチア・ドイツ人によって発展し、国境地域で歴史的に形成されてきた陶磁器生産の文化の保全を目的としたものである。しかし事業範囲は文化財保護だけではなく、地場産業としての製陶業の保護や、担い手の職業訓練も含まれている。そして、陶磁器文化を同地域のワイン文化と結びつけることで新たな観光資源として価値づけをし、国境を越えたツーリズムの発展を促している。今後こうした取り組みが地域に根付き、製陶業や観光業の発展に繋がるのかは、EU による補助金の終了後の状況を調べていくことが必要であろう。

(4)チェコとオーストリアは約 460 キロメートルにわたって国境を接しているが、そのうちタヤタール/ポディイーの二つの「一体型」国立公園による共同の自然環境保全運動と、一つの都市が国境によって分断されたグミュント市とチェスケー・ヴェレニツェ市における交流事業の二つに対象を絞り、国境を越えた協力事業のこれまでの展開について調査を進めた。まずチェコのズノイモ市の市立図書館でチェコ・オーストリア国境地域におけるこれまでの政治的および社

会的状況と、チェコ側のポディイー国立公園（1991 年 3 月 20 日創設）およびオーストリア側のタヤタール国立公園（1997 年 10 月 26 日創設）に関する資料・文献を収集した。調査の結果、チェコ・オーストリア国境線両側の住民は歴史的に密接な関係を維持してきたが、チェコスロヴァキア成立から第二次世界大戦後のドイツ人追放にいたるまでの諸事件が分断をもたらし、冷戦期には交流はほぼ途絶えたこと、1980 年頃からディイェ（タヤ）川流域の環境保全が注目され、両地域の協力を推進させたが、国境線を挟む地域が事実上一体となった国立公園を維持・管理する上での問題点や課題もあることが明らかになった。

ついで、ズノイモ市のポディイー国立公園管理事務所における聞き取り調査、およびオーストリアのザンクト・ペルテン市の州立図書館における調査をもとに報告をまとめ、チェコ側では国境地帯が厳重に管理されたが故にかえって貴重な自然空間が維持され、体制転換後に比較的早く国立公園が創設されたこと、対するオーストリア側では権利関係の調整などの問題により、国立公園創設に時間を要したことなどの事情を明らかにした。また、現在、国境線を挟んだ「一体型」国立公園のモデルとして積極的な活動が行われていることも明らかになった。

さらに、チェコのチェスケー・ヴェレニツェ市にある地域交流団体 FENIX を訪問し、聞き取り調査を行った。オーストリアのグミュント市の郊外として発展したこの街は、第一次世界大戦後に国境線によって引き離され、冷戦期には完全に分断された。FENIX の所長 R.ショレル氏へのインタビューにより、冷戦崩壊の前後および現在までの国境沿いの地域の具体的状況について詳細に知ることができた。また、1989 年の国境開放以降、国境地域では基本的に友好的な関係が保たれていることを確認した。

最終的には、これまで現地で実施した調査をもとにしてチェスケー・ヴェレニツェおよびグミュントの歴史と現状に関する報告をまとめた。この二つの都市周辺地域は、冷戦期までの歴史的経験により、市街地を中心とした地域の一体性が失われたまま今日に至っている。しかし、チェスケー・ヴェレニツェにおける交流センターの活動からは、共同開催のイベントなどを通じて交流の促進が図られている様子も見ることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 加賀美　雅弘	４．巻 68(2)
２．論文標題 BrexitからアプローチするEU/ヨーロッパ理解	５．発行年 2020年
３．雑誌名 新地理（日本地理教育学会）	６．最初と最後の頁 62-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 加賀美雅弘	４．巻 13
２．論文標題 オーストリアにおけるロマのエスニック資源活用の可能性	５．発行年 2020年
３．雑誌名 地理空間（地理空間学会）	６．最初と最後の頁 215-229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24586/jags.13.3_215	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森明子	４．巻 2021 No. 3
２．論文標題 人とモノを媒介する場所という視座	５．発行年 2021年
３．雑誌名 民博通信Online	６．最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15021/00009691	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 飯嶋曜子	４．巻 550
２．論文標題 オーストリア・スロヴァキア国境地域におけるEU国境地域政策の展開―インターレグ・プログラムと地域文化の再生・保全―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 明治大学教養論集	６．最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 薩摩秀登	4．巻 67
2．論文標題 鉄のカーテンが通った街―チェコとオーストリア境界の都市チェスケー・ヴェレニツェとグミュントー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 人文科学論集（明治大学経営学部人文科学研究室）	6．最初と最後の頁 31-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 加賀美　雅弘	4．巻 75
2．論文標題 スロヴァキアのエスニック集団の変化とロマの社会的状況	5．発行年 2019年
3．雑誌名 学芸地理（東京学芸大学地理学会）	6．最初と最後の頁 16-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 飯嶋 曜子	4．巻 86
2．論文標題 オーストリア・イタリア国境地域における越境的地域連携とそのガバナンス	5．発行年 2020年
3．雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6．最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 加賀美　雅弘、椿　真智子、荒井　正剛、青木　久、澤田　康徳、牛垣　雄矢、中村　康子、橋村　修	4．巻 13
2．論文標題 地理教材としての景観写真の活用術	5．発行年 2018年
3．雑誌名 E-journal GEO（日本地理学会）	6．最初と最後の頁 409-413
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4157/ejgeo.13.409	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森　明子	4．巻 42（3）
2．論文標題 新世紀ミュージアム　プロイセン文化財　ベルリン国立博物館群　ヨーロッパ諸文化博物館	5．発行年 2018年
3．雑誌名 月刊みんぱく	6．最初と最後の頁 141-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 薩摩　秀登	4．巻 65
2．論文標題 鉄のカーテンから「共生型」国立公園へ―ディイェ渓谷に二つの国立公園が誕生するまで	5．発行年 2019年
3．雑誌名 人文科学論集（明治大学経営学部人文科学研究室）	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 加賀美雅弘	4．巻 73
2．論文標題 EU国境地域オーストリア・ブルゲンラント州の地域性―民族共生を踏まえた検討	5．発行年 2017年
3．雑誌名 学芸地理（東京学芸大学地理学会）	6．最初と最後の頁 32-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 加賀美雅弘	4．巻 69
2．論文標題 ヨーロッパにおける地名表記に関する検討	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅱ	6．最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森　明子	4．巻 157
2．論文標題 社会的なものをいかに描くか――ケアが発動する場所への関心	5．発行年 2017年
3．雑誌名 民博通信	6．最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15021/00008475	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 加賀美雅弘
2．発表標題 オーストリアにおけるロマのエスニック資源活用の可能性
3．学会等名 地理空間学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 加賀美雅弘
2．発表標題 BrexitからアプローチするEU/ヨーロッパ理解
3．学会等名 日本地理学会（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 森　明子
2．発表標題 ケア労働者を迎える家族―オーストリア農村の調査から―
3．学会等名 日本文化人類学会
4．発表年 2019年

１．発表者名 森　明子
２．発表標題 EU農業政策とホーフ―オーストリアの事例―
３．学会等名 国立民族学博物館
４．発表年 2020年

１．発表者名 加賀美　雅弘
２．発表標題 オーストリア国境地域におけるロマ共生の動向
３．学会等名 2018年度日本地理教育学会第68回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yamamoto, M., Steinicke, E., Nakagawa, S. and Iijima, Y.
２．発表標題 Multi-Local Living by German Population in Tyrol (Austria)
３．学会等名 26th Annual Colloquium of the Commission on the Sustainability of Rural Systems (CSRS) of the International Geographical Union (IGU), Santiago de Compostela (国際学会)
４．発表年 2018年

１．発表者名 加賀美雅弘
２．発表標題 オーストリア・ブルゲンラント州における民族共生に関する検討
３．学会等名 2017年人文地理学会大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 加賀美雅弘
２．発表標題 地理教材としての景観写真の活用術
３．学会等名 2018年日本地理学会春季学術大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 山本　充、中川聡史、飯嶋曜子
２．発表標題 オーストリア・チロル農山村におけるドイツ人による二地域居住の進展
３．学会等名 2017年日本地理学会秋季学術大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 飯嶋曜子
２．発表標題 EUのボトムアップ型農村開発LEADER事業の展開―マルチレベル・ガバナンス論の観点から―
３．学会等名 2018年日本地理学会春季学術大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計10件

１．著者名 矢ケ崎 典隆、加賀美 雅弘、牛垣 雄矢	４．発行年 2020年
２．出版社 朝倉書店	５．総ページ数 184
３．書名 地誌学概論	

1．著者名 Iris Edenheiser, Elisabeth Tietmeyer, Susanne Boersma	4．発行年 2021年
2．出版社 Reimer	5．総ページ数 256
3．書名 What’s Missing? Collecting and Exhibiting Europe	

1．著者名 加賀美 雅弘	4．発行年 2019年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 176
3．書名 食で読み解くヨーロッパ―地理研究の現場から―	

1．著者名 加賀美 雅弘	4．発行年 2019年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 180
3．書名 ヨーロッパ	

1．著者名 森 明子	4．発行年 2019年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 328
3．書名 ケアが生まれる場―他者とともに生きる社会のために―	

1．著者名 加賀美　雅弘、荒井　正剛	4．発行年 2018年
2．出版社 古今書院	5．総ページ数 108
3．書名 景観写真で読み解く地理（東京学芸大学地理学会シリーズⅡ　3）	

1．著者名 伊藤 徹哉、島津 弘、立正大学地理学教室	4．発行年 2019年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 116
3．書名 地理を学ぼう 海外エクスカーション	

1．著者名 大場　茂明、大黒　俊二、草生　久嗣	4．発行年 2018年
2．出版社 清文堂出版	5．総ページ数 254
3．書名 文化接触のコンテクストとコンフリクト―環境・生活圏・都市	

1．著者名 Paul, V., Gonzalez, R. C. L., Trillo-Santamaria, J.-M. and McKenzie, F. H.	4．発行年 2018年
2．出版社 Universidade de Santiago de Compostela	5．総ページ数 570
3．書名 Infinite Rural Systems in a Finite Planet: Bridging Gaps towards Sustainability	

１．著者名 矢ヶ崎典隆、山下清海、加賀美雅弘編	４．発行年 2018年
２．出版社 朝倉書店	５．総ページ数 142
３．書名 グローバリゼーション―縮小する世界（シリーズ地誌トピックス　3）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	森　明子 (MORI Akiko) (00202359)	国立民族学博物館・グローバル現象研究部・教授 (64401)	
研究分担者	飯嶋　曜子 (IIJIMA Yoko) (20453433)	明治大学・政治経済学部・専任准教授 (32682)	
研究分担者	薩摩　秀登 (SATSUMA Hideto) (70211274)	明治大学・経営学部・専任教授 (32682)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関